

曙

FIFAワールドカップサウジアラビア大会で日本は戦前の予想を覆してベスト16入りし、日本中が熱狂に包まれました。そんな中グループリーグの最終戦で、0-1と負けていたにも関わらず、このままでいけばグループリーグが突破できるため、最後の10分間ボール回しをしたことが、大きな物議をかもしました▼監督の采配が「英断」だったのか、「スボーツマンシップに反する行為」なのか、喧々諤々の議論となりましたが、もちろん正解はありません。ここで問題にしたいのは、事の顛末を知っているものが、後から物事を検証するには、どれだけ当事者の立場に立てるかということ。短い時間でこの決断をするには、さまざまなプレッシャーがあつた事は想像に難くありません。日本中の期待を一身に集めたこの決断をした監督は、素晴らしかつたと思います▼立ち返つて私たち医療業界も同じ事が言えます。何かの処置を患者さんに行う場合、すぐに決断しなくてはならない事も多々あります。その判断は、必ずしも病状を好転させない事もあります。結果的に好転しなかつた場合、結果を知っているものがその判断が正しいかどうかが検証する際には、相当に慎重にならなければなりません▼特に「結果」が分かつていない事柄を検証する場合は、どうしても思考が「結果」を知っているため、こちら側に引つ張られてしまふ事を常に意識しなければなりません。将棋の羽生善治さんはある番組で次のような事を述べています。「私達は常に選択を迫られるのですが、選んだ選択肢でうまくいかなくなつた場合、逆の選択肢の方が良かったのではなにかと考えがちです。しかし、実は反対の選択肢を選んだ場合は、もつと悪い結果になつていたかもしれない」と。私達は常にこの事を念頭に置いて物事に当たりたいものです。

(みやぎ町 今村 洋一)